## 2　麦　類

### (1) 要　旨

**ア　作付面積**

平成19年産４麦（小麦、二条大麦、六条大麦及び裸麦）の子実用作付面積は26万4,000haで、前年産に比べて8,100ha（３％）減少した。（表２－１、図２－１）

**イ　収穫量**

平成19年産の４麦の収穫量は110万5,000ｔで、前年産に比べて９万3,000ｔ（９％）増加した。（表２－１、図２－１）

図２－１　４麦の作付面積及び収穫量の推移（全国）

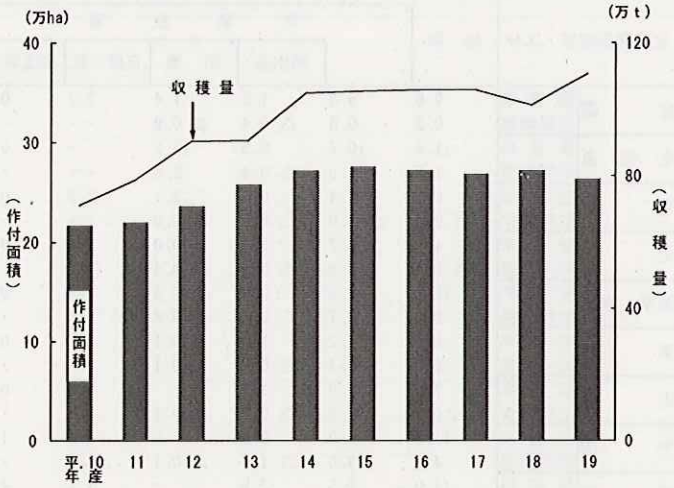



表２－１　平成19年産４麦の収穫量

| 区分 | | 作付面積 | 10a当たり収量 | 収穫量 | 前年産との比較 作付面積 対差 | 作付面積 対比 | 10a当たり収量 対比 | 収穫量 対差 | 収穫量 対比 | （参考）10a当たり平均収量対比 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 百ha | kg | 百t | 百ha | % | % | 百t | % | % |
| 全国 | ４麦計 | 2 640 | … | 11 050 | △ 81 | 97 | … | 930 | 109 | … |
| | 小麦 | 2 097 | 434 | 9 101 | △ 86 | 96 | 113 | 729 | 109 | 110 |
| | 二条大麦 | 345 | 372 | 1 282 | 4 | 101 | 107 | 99 | 108 | 106 |
| | 六条大麦 | 157 | 332 | 521 | 4 | 103 | 119 | 96 | 123 | 105 |
| | 裸麦 | 40 | 356 | 143 | △ 4 | 91 | 117 | 9 | 107 | 113 |
| 北海道 | ４麦計 | 1 194 | … | 5 899 | △ 35 | 97 | … | 668 | 113 | … |
| | 小麦 | 1 171 | 497 | 5 820 | △ 34 | 97 | 116 | 679 | 113 | 112 |
| | 二条大麦 | 23 | 344 | 79 | △ 0 | 99 | 89 | △ 11 | 88 | 98 |
| 都府県 | ４麦計 | 1 446 | … | 5 146 | △ 47 | 97 | … | 261 | 105 | … |
| | 小麦 | 926 | 354 | 3 281 | △ 51 | 95 | 107 | 50 | 102 | 106 |
| | 二条大麦 | 322 | 374 | 1 203 | 4 | 101 | 109 | 110 | 110 | 106 |
| | 六条大麦 | 157 | 332 | 521 | 4 | 103 | 119 | 96 | 123 | 105 |
| | 裸麦 | 40 | 356 | 143 | △ 4 | 91 | 117 | 9 | 107 | 113 |

注：１　この統計表は、子実用である。
　　２　（参考）10a当たり平均収量対比とは、10a当たり平均収量（過去７か年のうち、最高、最低を除いた５か年の平均値）と当年産の10a当たり収量との対比である（以下の各統計表について同じ）。

## 表２－２　平成19年産４麦の収穫量（全国農業地域別）

| 全国農業地域 | ４麦計 作付面積 | ４麦計 収穫量 | 小麦 作付面積 | 小麦 10a当たり収量 | 小麦 収穫量 | 小麦 (参考)10a当たり平均収量対比 | 二条大麦 作付面積 | 二条大麦 10a当たり収量 | 二条大麦 収穫量 | 二条大麦 (参考)10a当たり平均収量対比 | 六条大麦 作付面積 | 六条大麦 10a当たり収量 | 六条大麦 収穫量 | 六条大麦 (参考)10a当たり平均収量対比 | 裸麦 作付面積 | 裸麦 10a当たり収量 | 裸麦 収穫量 | 裸麦 (参考)10a当たり平均収量対比 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 百ha | 百t | 百ha | kg | 百t | % | 百ha | kg | 百t | % | 百ha | kg | 百t | % | 百ha | kg | 百t | % |
| 全国 | 2 640 | 11 050 | 2 097 | 434 | 9 101 | 110 | 345 | 372 | 1 282 | 106 | 157 | 332 | 521 | 105 | 40 | 356 | 143 | 113 |
| 北海道 | 1 194 | 5 899 | 1 171 | 497 | 5 820 | 112 | 23 | 344 | 79 | 98 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 都府県 | 1 446 | 5 146 | 926 | 354 | 3 281 | 106 | 322 | 374 | 1 203 | 106 | 157 | 332 | 521 | 105 | 40 | 356 | 143 | 113 |
| 東北 | 96 | 198 | 82 | 197 | 161 | 93 | - | - | - | - | 14 | 257 | 36 | 89 | - | - | - | - |
| 北陸 | 81 | 289 | x | 157 | x | 127 | 0 | 190 | 0 | 158 | 80 | 360 | 288 | 123 | - | - | - | - |
| 関東・東山 | 403 | 1 278 | 228 | 327 | 746 | 85 | 121 | 302 | 366 | 79 | 53 | 308 | 164 | 85 | x | 315 | x | 84 |
| 東海 | 146 | 456 | 143 | 311 | 445 | 107 | 0 | 72 | 0 | 35 | 3 | 309 | 10 | 118 | 0 | 300 | 0 | 150 |
| 近畿 | 98 | 284 | 88 | 286 | 252 | 110 | 2 | 268 | 4 | 100 | 6 | 353 | 21 | 108 | 2 | 341 | 7 | 125 |
| 中国 | 40 | 162 | 13 | 343 | 44 | 117 | 25 | 454 | 113 | 131 | 1 | 263 | 2 | 141 | x | 303 | x | 129 |
| 四国 | 39 | 143 | 16 | 367 | 58 | 104 | 0 | 392 | 1 | 124 | - | - | - | - | 23 | 367 | 83 | 106 |
| 九州 | 543 | 2 336 | 356 | 442 | 1 572 | 122 | 174 | 413 | 718 | 124 | 0 | 383 | 0 | 104 | 13 | 344 | 46 | 125 |
| 沖縄 | 0 | 0 | 0 | 171 | 0 | 95 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |

注：この統計表は、子実用である。

## (2) 解　説

### ア　小麦

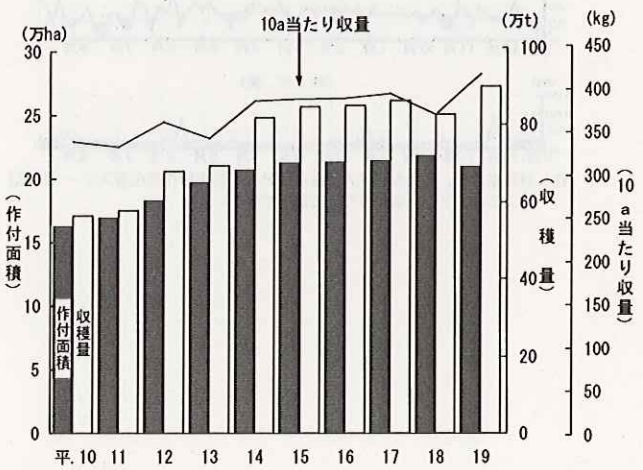
(ｱ) 作付面積

小麦の作付面積は20万9,700haで、前年産に比べて8,600ha（４％）減少した。

これを、北海道、都府県別にみると、北海道は11万7,100ha、都府県は９万2,600haで、前年産に比べてそれぞれ3,400ha（３％）、5,100ha（５％）減少した。

これは、北海道では野菜等への転換、都府県では九州において焼酎用の需要が多い二条大麦への転換があったこと等から減少したためである。（表２－２、図２－２）

図２－２　小麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）




(ｲ) 10ａ当たり収量

全国平均の10ａ当たり収量は434kgで、前年産を50kg（13%）上回った。

なお、10ａ当たり平均収量対比は110%となった。（表２－２、図２－２）

ａ　北 海 道

10ａ当たり収量は497kgで、前年産を70kg（16%）上回った。

これは、おむね天候に恵まれたことから生育が良好であったことに加えて、登熟も順調であったことによる。（表２－２、図２－３）

b 都 府 県

10ａ当たり収量は354kgで、前年産を23kg（７％）上回った。

これは、関東・東山地域において12月下旬から１月上旬の降雨の影響により初期生育が抑制されたものの、九州などでは12月から２月にかけて気温が平年を上回り生育が良好であったことに加え、その後おおむね天候に恵まれ登熟が順調であったことによる。（表２－２、図２－４）

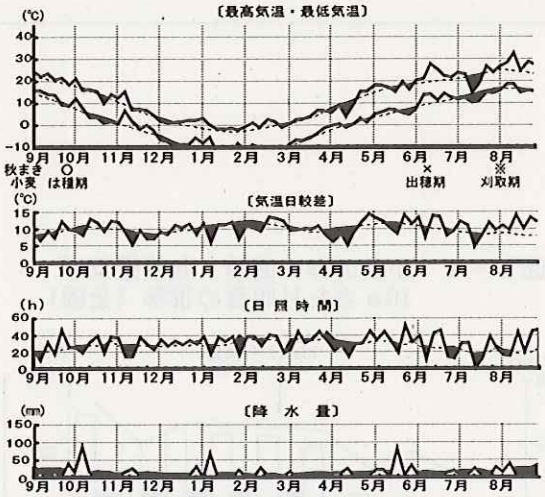
(ｳ) 収穫量

収穫量は91万100ｔで、前年産に比べて７万2,900ｔ（前年産対比９％）増加した。

このうち、北海道の収穫量は58万2,000tで、作付面積が前年産に比べて減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったため、前年産に比べて6万7,900ｔ（13%）増加した。

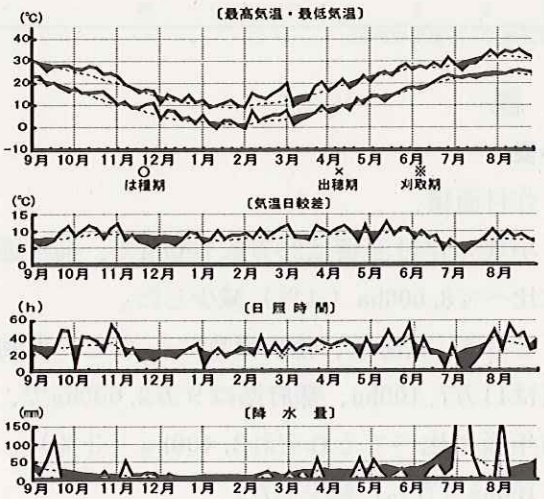
一方、都府県の収穫量は32万8,100tで、作付面積が前年産に比べて減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったため、前年産に比べて5,000t（２％）増加した。（表２－２、図２－２）

図２－３　平成19年産麦作期間の半旬別気象経過（帯広）




注：耕種期日は、農林水産省大臣官房統計部『農作物作型生育ステージ総覧』による（以下の各気象グラフにおいて同じ）。

図２－４　平成19年産麦作期間の半旬別気象経過（佐賀）



## イ　二条大麦

(ｱ) 作付面積

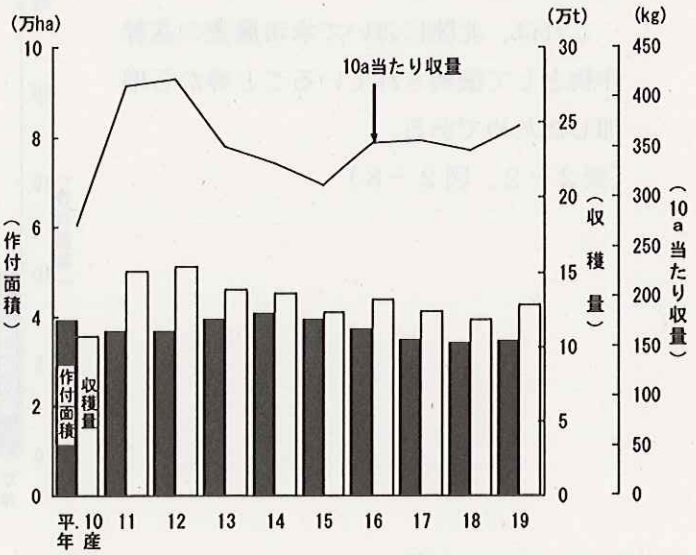
二条大麦の作付面積は３万4,500haで、前年産に比べて400ha（１％）増加した。

これを、北海道、都府県別にみると、北海道は2,300haで前年産に比べて30ha（１％）減少した。都府県は３万2,200haで前年産に比べて400ha（１％）増加した。

これは、九州において焼酎用の需要が多く、小麦からの転換があったこと等から増加したためである。

（表２－２、図２－５）

図２－５　二条大麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）




(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は372kgで、前年産を25kg（７％）上回った。

これは、関東・東山地域において12月下旬から１月上旬の降雨の影響により初期生育が抑制されたものの、都府県のその他の地域では12月から２月にかけて気温が平年を上回り生育が良好であったことに加え、その後おおむね天候に恵まれ登熟が順調であったことによる。

（表２－２、図２－５、２－６、２－７）

(ｳ) 収穫量

収穫量は12万8,200tで、前年産に比べて9,900t（８％）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて増加したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。（表２－２、図２－５）

図２－６　平成19年産麦作期間の半旬別気象経過（福岡）

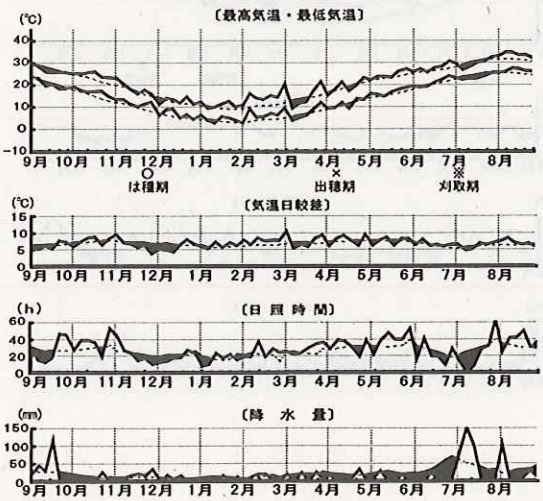
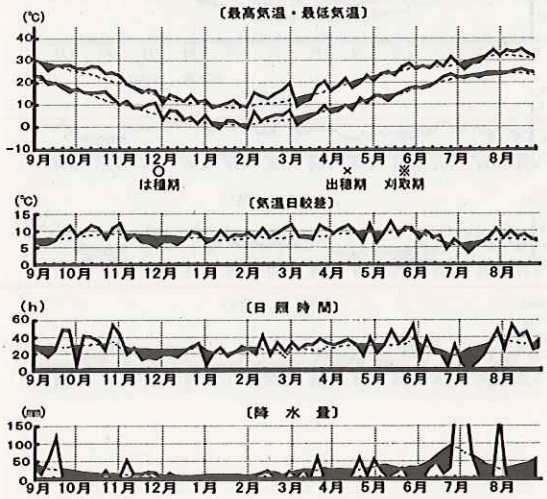



図２－７　平成19年産麦作期間の半旬別気象経過（佐賀）



## ウ　六条大麦

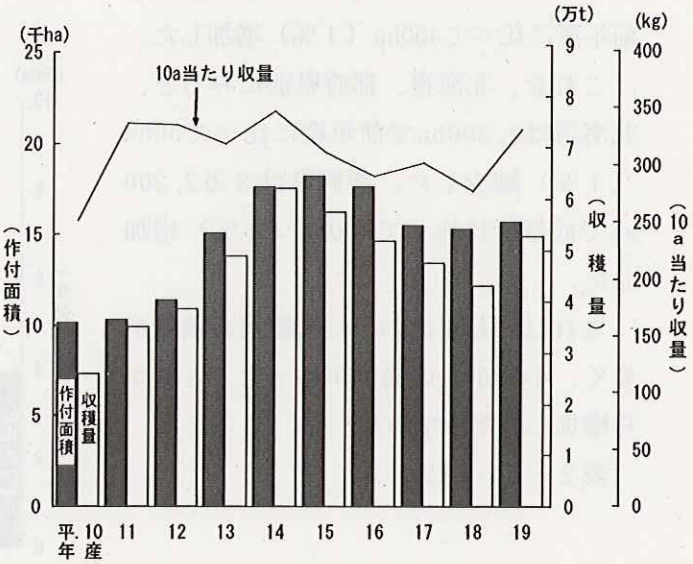
(ｱ) 作付面積

六条大麦の作付面積は１万5,700haで、前年産に比べて400ha（３％）増加した。

これは、北陸において水田農業の基幹作物として振興されていること等から増加したためである。

（表２－２、図２－８）

図２－８　六条大麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）




(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は332kgで、前年産を54kg（19%）上回った。

これは、12月から２月にかけて気温が平年を上回り生育が良好であったことに加え、その後おおむね天候に恵まれ登熟が順調であったことによる。（表２－２、図２－８、２－９、２－10）

(ｳ) 収穫量

収穫量は５万2,100tで、前年産に比べて9,600t（23%）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて増加したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。（表２－２、図２－８）

図２－９　平成19年産麦作期間の半旬別気象経過（富山）

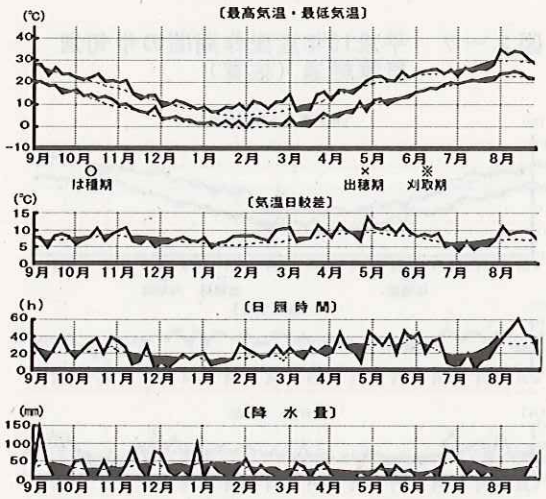
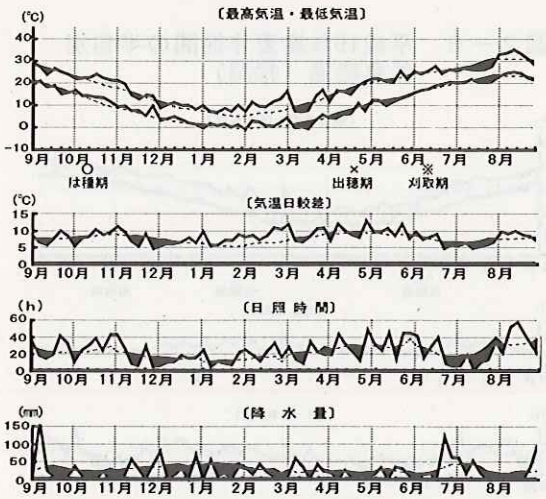



図２－10　平成19年産麦作期間の半旬別気象経過（福井）



## エ　裸麦

(ｱ) 作付面積

裸麦の作付面積は4,020haで、前年産に比べて400ha（９％）減少した。

これは、生産者の労働力事情等により減少したためである。(表２－２、図２－11)

(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は356kgで、前年産を53kg（17%）上回った。

これは、12月から２月にかけて気温が平年を上回り生育が良好であったことに加え、その後おおむね天候に恵まれ登熟が順調であったことによる。(表２－２、図２－11、２－12)

(ｳ) 収穫量

収穫量は１万4,300tで、前年産に比べて900t（７％）増加した。

これは、作付面積が減少したものの、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。

(表２－２、図２－11)

図２－11　裸麦の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）

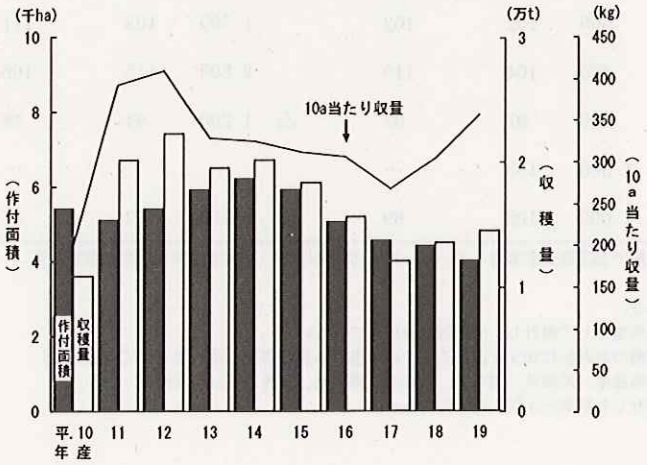
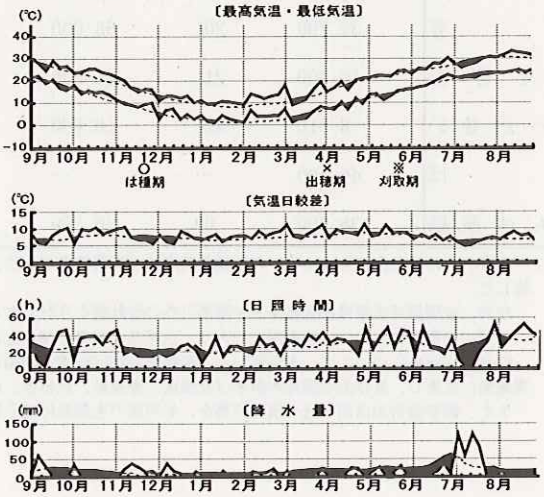



図２－12　平成19年産麦作期間の半旬別気象経過（松山）



# ３　豆　類・そ　ば

## （１）要　旨

平成19年産の豆類（乾燥子実）の全国の収穫量は、大豆が22万6,700ｔで前年産に比べて2,500ｔ（１％）減少し、らっかせいが１万8,800ｔで前年産に比べて1,200ｔ（同６％）減少した。

一方で、小豆は６万5,600ｔ、いんげんは２万1,900ｔで、前年産に比べてそれぞれ1,700ｔ（３％）、2,800ｔ（15％）増加した。

また、主産県における平成19年産そばの収穫量は２万6,300ｔで、前年産に比べて2,300ｔ（８％）減少した。（表３）

**表３　平成19年産豆類（乾燥子実）（全国）及びそばの収穫量（主産県）**

| 区　分 | 作付面積 | 10ａ当たり収量 | 収穫量 | 前年産との比較 作付面積 対差 | 作付面積 対比 | 10ａ当たり収量 対比 | 収穫量 対差 | 収穫量 対比 | （参考）10ａ当たり平均収量対比 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ha | kg | t | ha | % | % | t | % | % |
| 大豆 | 138 300 | 164 | 226 700 | △ 3 800 | 97 | 102 | △ 2 500 | 99 | 97 |
| 小豆 | 32 700 | 201 | 65 600 | 500 | 102 | 102 | 1 700 | 103 | 111 |
| いんげん | 10 400 | 211 | 21 900 | 400 | 104 | 110 | 2 800 | 115 | 106 |
| らっかせい | 8 310 | 226 | 18 800 | △ 290 | 97 | 97 | △ 1 200 | 94 | 96 |
| そば | 46 100 | … | … | 1 300 | 103 | … | … | … | … |
| うち主産県 | 38 400 | 68 | 26 300 | 1 000 | 103 | 89 | △ 2 300 | 92 | 94 |

注：１　小豆、いんげん及びらっかせいの収穫量調査は主産県調査であり、３年周期で全国調査を実施している。平成20年産については主産県を対象に調査を実施した。
　なお、全国値は主産県調査結果と主産県以外の推計値を合計したものである。
２　そばの収穫量調査は、主産県調査であり、主産県の結果を積み上げた主産県値として集計し、全国値は推計していない。
　なお、主産県については、本年産から、前年産の作付面積が全国の作付面積のおおむね80％を占めるまでの都道府県及び事業（強い農業づくり交付金）実施県に変更し、具体的な調査対象県は北海道、青森県、秋田県、山形県、福島県、茨城県、栃木県、新潟県、福井県、長野県及び広島県とした。
　また、前年産対比は前年産の調査結果を、本年産の主産県に組み替えて集計した結果と比較したものである。

## （２）解　説

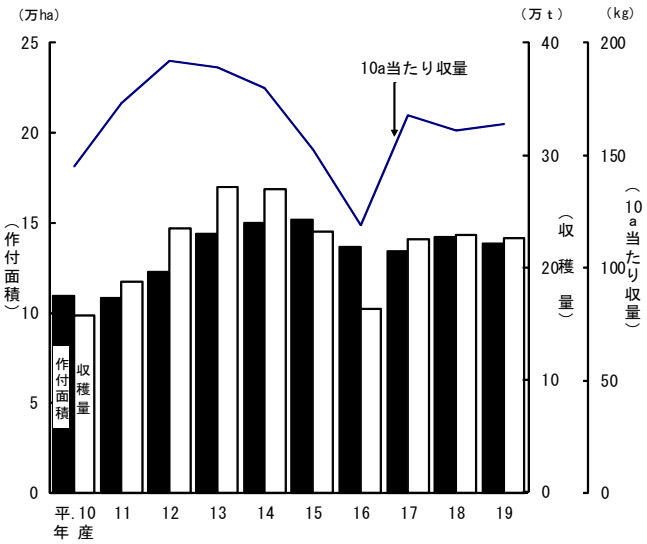
### ア　大豆（乾燥子実）

(ｱ) 作付面積

平成19年産大豆の作付面積は13万8,300haで、前年産に比べて3,800ha（３％）減少した。

これは、東北において水稲からの転換により増加したものの、北海道において小豆、いんげんへの転換等があり減少したためである。（表３、図３－１）

**図３－１　大豆の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）**



(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は164kgで、前年産を３kg（２％）上回った。

これは、北海道で６月中旬から７月中旬にかけての少雨及び７月上旬から下旬にかけての低温の影響で一さや当たり粒数が減少し前年産を下回ったものの、九州において天候に恵まれ、台風等で作柄の悪かった前年産を大きく上回ったためである。（表３、図３－１）

(ｳ) 収穫量

収穫量は22万6,700ｔで、前年産に比べて2,500ｔ（１％）減少した。

これは、10ａ当たり収量は前年産を上回ったものの、作付面積が前年産に比べて減少したためである。（表３、図３－１）

## イ　小豆（乾燥子実）

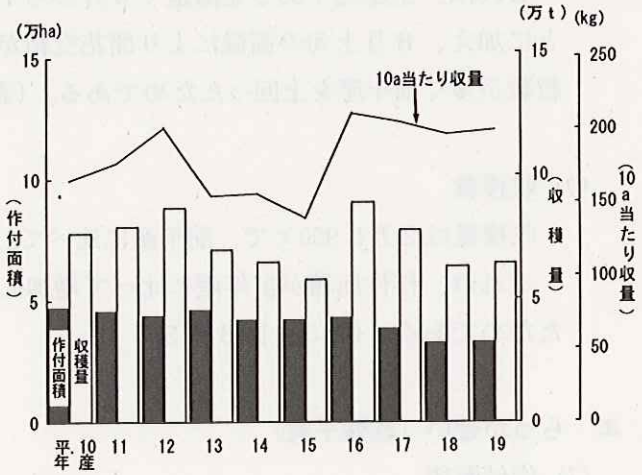
(ｱ) 作付面積

平成19年産小豆の作付面積は３万2,700haで、前年産に比べて500ha（２％）増加した。

これは、全国の約７割を占める北海道において、前年産における生産者団体による作付け抑制推進により需給動向にやや改善がみられ増加したためである。

（表３、図３－２）

図３－２　小豆の作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）




(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は201kgで、北海道の作付面積の割合が高まったため、前年産に比べて３kg（２％）上回った。

（表３、図３－２）

(ｳ) 収穫量

収穫量は６万5,600ｔで、前年産に比べて1,700ｔ（３％）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて増加したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。（表３、図３－２）

## ウ　いんげん（乾燥子実）

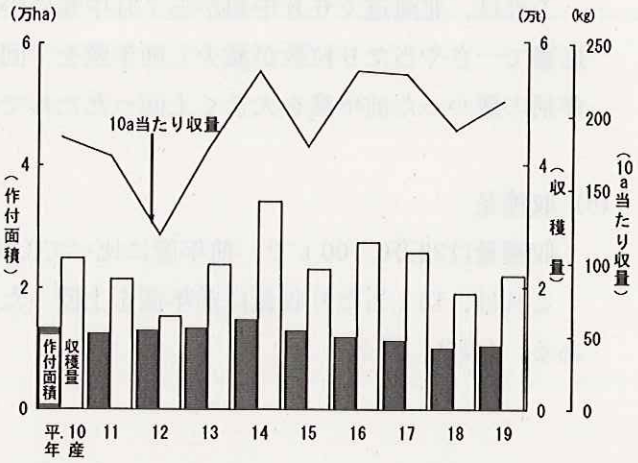
(ｱ) 作付面積

平成19年産いんげんの作付面積は1万400haで、前年産に比べて400ha（4％）増加した。

これは、全国の約9割を占める北海道において、前年産における生産者団体による作付け抑制推進により需給動向にやや改善がみられ増加したためである。

（表3、図3－3）

図3－3　いんげんの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）




(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は211kgで、前年産に比べて20kg（10％）上回った。

これは、主産地である北海道で6月から7月にかけての高温により初期生育が順調であったことに加え、8月上旬の高温により開花受精が良好であったことから、着さや数及び一さや当たり粒数が多く前年産を上回ったためである。（表3、図3－3）

(ｳ) 収穫量

収穫量は2万1,900ｔで、前年産に比べて2,800ｔ（15％）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて増加したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を上回ったためである。（表3、図3－3）

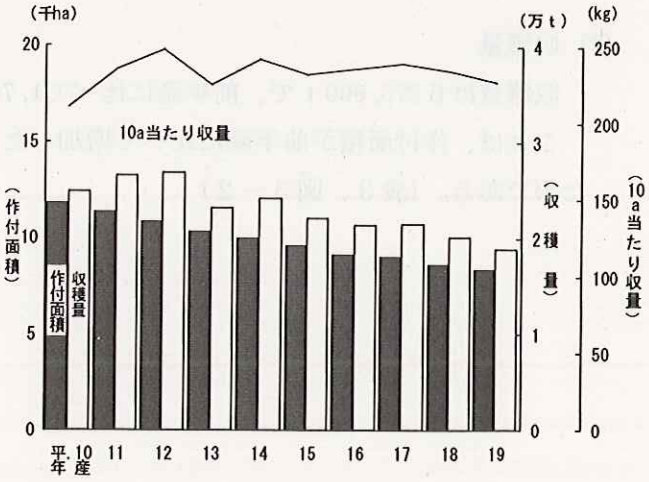
## エ　らっかせい（乾燥子実）

(ｱ) 作付面積

平成19年産らっかせいの作付面積は8,310haで、前年産に比べて290ha（3％）減少した。

これは、全国の約7割を占める千葉県において、生産者の労働力事情等により減少したためである。（表3、図3－4）

図3－4　らっかせいの作付面積、収穫量及び10ａ当たり収量の推移（全国）




(ｲ) 10ａ当たり収量

10ａ当たり収量は226kgで、前年産を7kg（3％）下回った。

これは、主産地である千葉県で7月の日照不足の影響で生育が抑制されたこと及び8月以降の高温・少雨の影響で登熟が不良となったことにより前年産を下回ったためである。（表3、図3－4）

(ｳ) 収穫量

収穫量は１万8,800ｔで、前年に比べて1,200ｔ（同６％）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10ａ当たり収量が前年産を下回ったためである。（表３、図３－４）

## オ　そば

(ｱ) 作付面積（全国）

平成19年産そばの作付面積は４万6,100haで、前年産に比べて1,300ha（３％）増加した。

これは、東北において水稲からの転換により増加したことや、北海道において省力的な作物として小麦等からの転換があり増加したためである。

このうち、主産県（計）の作付面積は３万8,400haで、前年産に比べて1,000ha（３％）増加した。（表３）

(ｲ) 10ａ当たり収量（主産県）

主産県における10ａ当たり収量は68kgで、前年産に比べて９kg（11％）下回った。

これは、北海道で６月中旬から７月中旬にかけての少雨により初期生育が抑制されたことに加えて、茨城県等で台風第９号による大雨の影響で発芽不良等となったためである。（表３）

(ｳ) 収穫量（主産県）

主産県の収穫量は２万6,300ｔで、前年産に比べて2,300ｔ（８％）減少した。

これは、作付面積は増加したものの、10a当たり収量が前年産を下回ったためである。（表３）